

# 花を持てる女

堀辰雄

青空文庫



私はその日はじめて妻をつれて亡き母の墓まいりに往った。

円通寺というその古い寺のある請地町は、向島むこうじまの私たち

のうちからそう離れてもいないし、それにそこいらの場末の町々

は私の小さい時からいろいろと馴染なじみのあるところなので、一度ぐ

らいはそういうところも妻に見せておこうと思つて、寺まで曳ひきこ

舟ねどお通りを歩いていってみることにした。私たちのうちを出て、

源森川に添つてしばらく往くと、やがて曳舟通りに出る。それか

らその掘割に添いながら、北に向うと、庚申塚橋こうしんづかとか、小梅橋

とか、七本松橋とか、そういうなつかしい名まえをもった木の橋がいくつも私たちの目のまえに現れては消える。ここいらも震災後、まるつきり変ってしまったけれども、またいつのまにか以前のように、右岸には大きな工場が立ち並び、左岸には低い汚きたない小家がぎっしりと詰まって、相對しながら掘割を挟はさんでいるのだつた。くさい、濁った水のいろも、昔のままといえは昔のままだつた。

地藏橋という古い木の橋を私たちは渡つて、向う側の狭い横町へはいつて往つた。すぐもうそこには左がわに飛木とびきいなり稲荷の枯れて葉を失つた銀杏いちようの古木が空にそびえ立っている。円通寺はその裏になつていて、墓地だけがその古い銀杏と道をへだてて右がわ

にある。黒いトタン堀べいの割れ目から大小さまざまな墓石を通行人の目に触れるがままに任せて。……

もうすこしゆくと請地の踏切に出るのだが、ここいらはことのほか、いかにもごみごみした、汚い、場末じみた光景を残している。乾物屋と油屋の間に挟まれた、花屋というのも名ばかりのよな店先で、花を少しばかり買い、それから寺に立ち寄って寺男に声をかけ、私たちだけで先きに墓地のほうへ往った。

墓地は、道路よりも低くなっているので、気味わるく湿じめ湿じめじめていて、無縁らしい古い墓のまわりの水たまりになっているのさえ二三見られる位だった。

「ずいぶん汚い寺で驚いたか。」私は妻のほうへふり返って言っ

た。

「元禄八年なんて書いてあるわ……」妻はそれにはすぐ返事をし  
ずに、立ち止つて自分のかたわらにある古い墓の一つに目をやっ  
ていた。それから何んとなくひとりごと独言のようにつた。「ずいぶ  
ん古いお寺なのね。」

私の母の墓は、その二百坪ほどある墓地の東北隅に東に面して  
立っている。私はその墓のまえにはじめて妻と二人して立つた。  
その柵さくのなかには黄楊つげと榿しきみの木とが植えられて、それがともども  
に花をつけていた。しかしそれは母の墓といつても、母ひとりの  
ための墓ではない。父方のかみじょうけ上条家の代々の墓なのである。上野  
の寺侍だったという祖父、やはり若いうち宮仕えをしていたとい

う祖母、明治のころ江戸派の彫金師として一家を成していたという伯父などと、私の見たことさえもないような人たちの間になって、震災で五十一の年に亡くなった私の母は、そこに骨を埋めているのである。

私と妻とは、その墓を前にして、寺男のくるのをしばらくぼんやりと待っていた。

「あのそばにある小さなお墓は誰れのですか。」

「さあ、誰れんだか……」私はそういわれて、母たちの墓のそばに黄楊の木の下になってちよこんと立っている、ごく小さな墓石へ目をやった。そういう墓石のあったことさえ、いままで私は殆んど気づかなかった。気づくことはあっても、それを気にしない

で見すごしていた。「なんだか子供のお墓のようだけれど、一度もきいたことがないなあ。」

妻も別にそれ以上それを知ろうとしなかったし、私もそのときちよつと不審におもつたきりでした。

寺男があかおけ關伽桶と線香とをもつてきて、墓のこけ苔を掃はらっている間、私たちは墓から数歩退いて、あらためて墓地全体をみやつた。

四囲には錆さびたトタン塀をめぐらしているきりで、一本も茂つた樹木なんぞがなくて、いかにもあらわなような感じで、沢山の墓石がそこには、それぞれに半ば朽ちはてた卒塔婆そとばを背負いながら、ぎつしりと入りまじっているばかり。——そしてそれらの高低さまざまな墓石のむらがりの上には、四月末の正午ちかい空が



ひろがって、近所の製造場の物音が何やら遠くなったり近くなったりしながら絶え絶えに聞えてくるのである。

私はこんな場末の汚い墓地に眠っている母を何かいかにも自分の母らしいようになつかしく思いながら、その一方、また、自分のそばに立つてはじめてこれからその母と対面しようとして心もち声も顔もはればれとしているような妻をふいとこんな陰鬱いんうつな周囲の光景には少し調和しないように感じ、そしてそれもまたいいと思った。いわば、私は一つの心のなかに、過去から落ちてくる一種の翳りかげと、同時に自分の行く末から差し込んでくる灰ほのあかりとの、そこに入りまじった光と影との工合を、何となしに夢うつつに見出みいだしていた。

寺男が苔を掃つて香華こうげを供えたのち、ついでに隣りの小さな墓の苔も一しよに掃つているのを見て、私はもう一度それに注目した。よほどそれは誰れの墓かと聞いてみようとしかけたが、何もいま聞くこともあるまいと思ひ返して、私はそのまま妻に目合めあいをして、二人いっしよに母の墓のまえに歩みよつて、ともどもに焼香した。

「これでいい……」私は何んとはつかずにそんなことを考えた。

## 一一

私たちがひと先まず落ちついたさきは、信州の山んなかだった。

そこで十日ばかりが、なんとということもなしに、過ぎた。何もかもこれから、——といったすつきりした気もちだった。

と、或<sup>ある</sup>あけがた、私たちはまだ寝ているうちに電報をうけとつた。父の危篤を知らせて来たものだった。何んの前ぶれもなかった。私<sup>あわ</sup>たちは慌てて支度<sup>したく</sup>をし、そのまま山の家を鎖<sup>とぎ</sup>して、上京した。

正午ちかく向島のうちに着いてみると、そのあけがた脳溢血で倒れたきり、父はずつと昏<sup>こんすい</sup>睡したままで、私たちの帰つたのをも知らなかった。そういう昏睡状態はまだ二三日つづいていた。

そのあいだに、私たちはいろいろな人たちの見舞をうけた。父方の、四つ木や立<sup>たていし</sup>石の親<sup>しんせき</sup>戚の人々もきた。私の小さい時から

うちの弟子でしだったもの、下職だったものたちも入れかわり立ちかわり来た。それから母方の、田端たばたのおばさんたちも来た。いこたちも来た。それからまだ麻布のおばさん——私が跡目をついでいる堀家のほうのたった一人の身うち——までも来てくれた。

私はまだ自分が結婚したことをそういう人たちには誰れにも知らせていなかった。それで、はじめのうちは来る人ごとに妻をひきあわせていたけれど、

「そうだ、父は死ぬかも知れないのだ」と思うと、すこしでも父のそばにいた方がいいような気がした。

それからは私は妻のほうのことは田端のおばさんに一任して、自分なるだけ父の枕まくらもとにいるようにしていた。云ってみれば、

父がそうやっている私のことをなんにも知らずにいる、——それが私にそういうことを少しも羞はにかまずにさせていてくれた。

向うの間で、いま妻はどうしているだろうかと私はときおり気にかけた。すると、その妻が知らないいろいろな人たちの間でまごまごしながら茶など運んでいるもの馴なれない姿が目に見えるよ  
うで、私はそれに何か可憐かれんなものを感じる事が出来た。いきづ  
まるような私の心もちが、それによって不意とわずかに緩和せら  
れることもあった。

父は四日目ぐらいから漸ようやく意識をとりかえしてきた。しかし、  
もうそのときは口は利きけず、右半身が殆ほとんど不随になつていた。  
いかにも変り果てた姿になつてしまつていた。

が、それなりに、父は日にまし快方に向つた。

「この分でゆけば安心だ。」皆が素晴らしい出した。

私たちが漸つと信州の山の家にかえつていったのは、それから半月ほどしてからだった。父のほうがそうやってどうにか落ちついたとき、今度は私が工合を悪くした。それで、父のほうは親身に世話をしてくれる人々に托たくすことが出来たので、私たちは思いきつて山の家にかえることにした。

それに私は一日も早く仕事をしはじめなければならなくなつていた。自分たちの暮らしのためばかりでなく、こんどは病人のほうにも幾分なりと仕送りしなければならぬので、私はどうして

いいか、しばらくは見当のつかないほどだった。

丁度そのとき或先輩が雑誌を世話してくれ、そこへ私は生れてはじめて続きものの小説を書くことになった。そのとき私はいまの自分の気もちに一番書きよさそうなものとして、自分の幼時に題材を求めた。一度は自分の小さいときの経験をも書いてみようと思っていたし、すこしまえにハンス・カロツサの「幼年時代」を読み、彼がそれをただ幼時のなつかしい想起としてでなしに、そこに何か人生の本質的なものを求めようとしている創作の動機に非常に共鳴していたので、こんどの仕事にはそう期待はかけられなかったが、とにかくそういうものへの試みの一つとしてやるだけのことはやってみようと考えたのだった。

「幼年時代」はそうして書きはじめたものなのである。

夏が過ぎ、秋になつても、私たちはまだ山で暮らしていた。冬が近づいて来る頃になつて、私たちは慌てて山を引きあげ、逗子ずしにある或友人の小さな別荘にしばらく落ちつくことになつた。そんな仮住みから仮住みへと、私は他の仕事と一しよにいつも「幼年時代」を持ち歩いていた。

父のほうは、秋になつてよくなり出すと、ずんずん快くなつた。小春日和びよりの日などには、看護の人に手をひいて貰もらつて、吾妻橋あずまばしまで歩いていったという便たよりなどが来た。それほど快くなりかけていた父が、二度目の発作を起したのは十二月のなかばだった。電報をみて、私たちが逗子から駈かけつけてきたときはもう夜中だ



った。父は深く昏睡したまま、まだ息はあつたけれど、今度は私  
たちもあきらめなければならなかつた。……

## 三

父の死後、私ははじめて自分の実父がほかにあつて、まだ私の  
小さいときに亡なくなつたのだということを知かされた。それを私  
に聞かせてくれたのは、田端のおばさん、すなわち私の母のいも  
うとの一人で、震災まえまでは私たちのうちのすぐ隣りに住みつ  
いていたおばさんである。――

実は父の百力日のすんだ折、寺でそのおばからちよつとお前の

耳にだけ入れておきたいことがあるから、そのうちひとりるときに寄っておくれな、といわれていた。

まだ逗子に蟄居ちつきよしていた時分で、それに何かと病気がちの折

だったので、私はおばにいわれていた事がときどき気になりながらも、なかなかひとりで東京に出て往いけなかつた。が、そのうち

何処どこからか、去年の暮れごろから目を患わづらっていたおじさんが急に

失明しかけているというような噂うわさを耳にして、私はこれは早く往

つてあげなければと思い、或ある日丁度自分の実家に用事があつて往

くことになつていた妻と連れだつて東京に出て、私だけ手みやげ

を持って、震災後ずっと田端の坂の下の小家におじとお婆と二人

きりで佗わびずま住いまをしてしている方へまわつた。それはもう六月になつ

ていた。

おじさんのうちでは、もうすっかり障子があけ放してあつて、八つ手などがほんの申もうしわ訣けのように植わつている三坪ばかりの小庭には、縁先きから雪の下がいちめんおに生ひろい拡がつて、それがものの見事に咲いていた。

「雪の下がきれいに咲いたものですね、こんなのもめずらしい。……」私はその縁先きちかくに坐りながら、気やすげにそう言つてしまつてから思わずはつとした。

目を患つているおじさんにはもうそれさえよく見えないでいるらしかった。しかし、おじさんは、花林かりんの卓のまえに向つたまま、思いのほか、上じょうきげん機嫌げんそうに答えた。

「うん、雪の下もそうなるときれいだろう。」

「……」私は黙っておじさんの顔のうえから再び雪の下のほうへ目をやっていた。

そのときおばさんがお茶を淹れて持ってきた。そしてあらためて私に無沙汰の詫びやら、手みやげのお礼などいい出した。無口なおじさんも急にいずまいを改めた。そこで私もあらためて、はじめにおじさんのこの頃の容態を、むしろそのおばさんの方に向けて問うのだった。

私が自分の生い立ちの一伍一什をこと細かに聞いたのは、それからずっと夕方になるまで、雪の下の咲いたやつがその間じ

ゆう私の目さきにちらちらしていた。おばさんが殆んどひとりで話し手になっていたが、無口なおじさんもとときどきそれへ短い言葉挿さんだ。……

私はそれまで、誰れにもはつきりそうと聞かせられていたわけではなかったが、いつからともなく自分勝手に、自分が上条のうちの一人息子だのに小さいときから堀の跡目をついでいるのは、何か私の生れたころの事情でそうされたのだらう位にしか考えていなかった。十七八の頃になってからは、それまでひとりで自分の耳にはいつていたいろんな事から推測して、自分の生れた頃、父が一時母と分かれて横浜かなんぞにいて他の女と同棲どうせいしている

たような小さなドラマがあつて、そのとき隣りに住んでいた老夫婦がたいへん母に同情し、丁度自分たちのところに跡とりがなかったので私を生れるとすぐその跡とりにした、——その位の小さいドラマはそこにあつたのにちがいないと段々考えるようになっていた。そんな事であつたあとで、父は再び東京に戻つてきて、向島のはずれの、無花果いちじくの木のある家に母と幼い私とをむかえたのではあるまいか。ともかくも、その小梅の父なる人は、幼い私のまえに、最初からいた人ではなくつて、どうも途中からひよつくり、私のまえに立ち現れてきたような気のする人なのである。

しかし、その突然自分のまえに現れた小梅の父が、自分の本当の父でないかも知れないなんぞというようなことは、私はずっと

大きくなって、ことによると自分の生い立ちには、何かの秘密がかく匿されていそうだ位のことは気のつきそうな年頃になつても、私はいっこう疑わなかつた。そして先きに母だけが死んで、父と二人きりで暮らさなければならなくなつてからも、私はそれをすこしも疑うことをしなかつた。

私が去年結婚して信州に出立した後、おばさんが或日向島の家にならずねてゆくと、父はたいへん上機嫌で、二人の間にはいろいろ私の小さいときからの話などがとりかわされたそうであるが、その折にも、真実の父がほかにあることをこの年になるまで知らずにいる私のことを、「あいつもかわいそうといえは、かわいそうだが、まあ自分にはこんなうれしいことはない。……」とい

つて、それから「どうか自分の死ぬまで何んにも知らせないでおいて下さい。」と何度もおばさんに頼んだそうだった。父の病にたお仆れたのは、それから数日立つか立たないうちだったのである。

……

私がそれまで名義上の父だとばかりおもっていた、堀浜之助と  
いうのが、私の生みの親だったのである。

広島藩の士族で、小さいときには殿様のきんじゆこしやう近習小姓をも勤めていたことのある人だそうである。維新後、上京して、裁判所に出ていた。書記の監督のようなことをしていたらしい。浜之助には、国もとから連れてきた妻があった。しかし、その妻は病身で、二人の間には子もなくて、さび淋しい夫婦なかつた。



そういう年も身分もちがうその浜之助という人に、江戸の落ちぶれた町家の娘であつた私の母がどうして知られるようになり、そしてそこにどういふ縁えにしが結ばれて私というものが生れるようになったか、そういう点はまだ私はなんにも知らないのである。——ともかくも、私は生れるとすぐ堀の跡とりにさせられた。その頃、堀の家は麴こうじまち町平河町にあつた。そして私はその家で堀夫婦の手によつて育てられることになり、私が母の懷を離れられるようになるまで、母も一しよにその家に同居していた。しかし、私がだんだん母の懷ふところを離れられるようになって来てからも、母はどうしても私を手放す気にはなれなかつた。それかといつて、いつまでも母子おやこしてその家にいることはなおさら出来にくかつた。

とうとう母はひとり意を決して、誰にも知らさずに、私をつれてその家を飛び出した。私が三つのおきのことである。丁度その頃堀の家には親類の娘で薫さんかおるという人が世話になっていた。その薫さんが私の母ははびいき鼻<sup>は</sup>鼻<sup>い</sup>で、すべての事情を知っていて、そのときも母の荷物をもつて一しよについて来てくれた。麴町の家を出、母が幼い私をかかえて、ひと先まず頼<sup>ま</sup>つていったのは、向島の、小梅の尼寺の近所に家を持っていたいもうと夫婦——それがいまの田端のおじさんとおばさんで——のところだった。漸ようやつとその家に落ちついて、まあこれでいいと思っていると、突然薫さんしやくが癩しやくをおこして苦しみだした。それがなかなか快よくならず、いつ一人で帰れるようになるか分からなかったので、とうとう役所に電話

をしてすべてを浜之助に告げた。浜之助はすぐ役所から飛んできた。それが小梅のおばさんの家に浜之助のきた最初であり、また最後であった。夕方、ようやく薫さんの癩もおさまり、浜之助が連れもどることになって、皆して水戸さまの前まで送っていった。そして土手のうえで、母と私とは、薫さんを伴った父と分かれた。

なんでも私はたいへん智慧ちえづくのが遅くつて、三つぐらいになつてもまだ「うま、うま……」ということしか言えなかったのに、その夕方、おばさんの家で父に逢あうと、私はとてもよろこんでしまつて、そのとき生れてはじめて「お父うちやん……お父うちやん……」と言えるようになった。よつぽどそんなところで思いがけず父に逢えたのがうれしかったものと見える。しかし、それが

私のその父に逢うことの出来た最後であつたそうだ。

それからまもなく、その父浜之助は、脳をわずらつて、もう再び世に立たない人となつてしまつたのである。

私の母は、それまで弟たちのところにいたおばあさんに来てもらつて、土手下の、水戸さまの裏に小さなたばこやの店をひらいた。

いままで私たちのいた麴町の堀の家は、立派な門構えの、玄関先きに飛石などの打つてあるような屋敷だつた。それだものだから、そうやつて土手下なんぞの小さな借家ずまいをするようになってからも、三つ四つの私は母やおばあさんに手をひかれて漸つとよちよちと歩きながら、そのへんなどに、ちよつと飛石でも打

つてあるような、門構えの家でも見かけると、急に「あたいのうち……あたいのうち……」といい出して、その中へちよちよこ  
と駆けこんでいってしまったって、みんなをよく困らせたそうだ。

それからもう一つ。——その頃よく町の辻つじなどに仁丹じんたんの大きな看板が出ていて、それには白い羽のふさふさとした大礼帽をかぶつて、美しい髭ひげを生はやした人の胸像が描かれてあつた、——それを見つけると、私はきまつてそのほうを指さして、「お父うちやん……」といつてきかなかつた、漸つとそのお父うちやんというのが言えるようになったばかりの幼い私は。……それはおそらく自分の父がそういう美しい髭を生やした人であつたのをよく覚えていたからでもあつたらう。それにひよつとしたら私の父が何か

の折にそんな文官の礼装でもしていたところを見たことでもあつて、それをまだどこかで覚えていたのかも知れない。……

長いこと脳をわずらっていた、父浜之助が遂に亡くなつたときは、私ももう七八つになつていたらう。私は三つするとき、母の手にひかれたまま、あの土手の上で父とわかれてからは、ただの一度もその父には逢わなかつたらしい。その父の死んだときにも、私にはもう新しい父が出来ていたので、その手前もあつたのだらう、何んにも知らされなかつた。継母のほうは、私が十二三になるまで存命していたようだが、その死んだのも私は知らないで過ぎました。

その継母という人は、全然私には記憶がないが、病身で、いつも青い顔をした、陰気な婦人だったらしい。しかし、不しあわせといえ、不しあわせな人だった。晩年は藤森とかいう自分の血すじの甥おいを近づけていたが、その甥は鉾山かなんかに手を出し、失敗して、それきり失しつ踪そうしてしまったそうである。

## 四

私は或ある一枚の母の若いころの写真覚えてる。それも震災のとき焼いてしまったが、私は亡なくなった母のことをいろいろ考えていると、ときどきそのごく若いころの母の写真を思い浮べる

ことがある。まだどことなく娘々していて、ちつとも私の母らしくないものだが、それだけにかえって私の心をそそるものと見える。

いまから数年ほどまえに、或る雑誌から私の一番美しいと思つた女性という題でもって何か書いてくれと乞こわれるままに、ふとその古い写真のことを思いついて、小さな随筆を一つ書いたことがある。ほんの素描のようなものに過ぎないが、ひと頃の私の母に対する心もちがよく出ていると思うので、此処ここにそれを挿はさんでおきたいと思う。



## 花を持てる女

私がまだ子供の時である。

私はよく手文庫の中から私の家族の写真を取り出しては、これはお父さんの、これはお母さんの、これは押<sup>おしあげ</sup>上の伯父さんのなどど、皆の前で一つずつ得意そうに説明をする。そのうち私はいつも一人の見知らぬ若い女の人の写真を手にしてすっかり当惑してしまう。

いくらそれはお前のお母さんの若い時分の写真だよと云われても、私にはどうしてもそれが信じられない。だって私のお母さん

はあんなによく肥えているのに、この写真の人はこんなに痩せていて、それにこの人の方が私のお母さんよりずっと綺麗だもの：  
と、私は不審そうにその写真と私の母とを見くらべる。

其処には、その見知らぬ女の人が生花をしているところが撮られてある。花瓶を膝近く置いて、梅の花かなんか手にしている。私はその女の人が大へん好きだった。私の母などよりもつと余計に。――

それから数年経った。私にもだんだん物事が分かるようになって来た。私の母は前よりも一そう肥えられた。それは一つは、私をどうかして中学の入学試験に合格させたいと、浅草の観音さまへ願掛けをされて、平生嗜まれていた酒と煙草を断られたため

でもあつた。そして私の母は、それ等の代りに急に思い立たれて生花を習われ出した。私はときおり、そういう生花を習われている母の姿を見かけるようになった。そんな事から私はまたひよつくり、何時の間にか忘れるともなく忘れていた例の花を持った女の人の写真のことを思い出した。その写真は私の心の中にそっくり元のままみずみずしい美しさで残っていた。私はその頃は頭ではそれが私の母の若い時分の写真であることを充分に認めることは出来ても、まだ心の底ではどうしてもその写真の人と私の母とを一緒にしたくないような気がしていた。

それから更らに数年が経った。私の母は地震のために死んだ。その写真も共に失われた。——そういう今となって、不思議なこ

とには、漸くようやその二つのものが私の心の中で一つに溶け合いだしている。そしてどういうものか、よく見なれた晩年の母おもかげの倂びりよりも、その写真の中の見なれない若い母の倂の方が、私にはずっと懐なつかしい。私はこの頃では、子供のときその写真の人がどうしても私の母だと信じられなかつたのは、その人を自分の母と信ずるにはその人があまりに美し過ぎたからではなかつたかと解している。その人がただ美しいと云うばかりでなしに、その容姿に何処どこということなく妙になまめいた媚態びたいのあつたのを子供心に私は感づいていて、その人を自分の母だと思うことが何んとなく気恥しかつたのであろう。そう云えば、その写真のなかで母のつけていた服装は、決して人妻らしいものでもなければ、また素しろ人娘むすめのそ

れでもなかつたようだ。今の私には、それがどうもその頃の芸者の服装だつたようにも思われる。そんな事からして私はこの頃では私の母は父のところへ嫁入る前は芸者をしていたのではないかと一人でひそかに空想をしているのである。——私の母の実家が随分貧しかつたらしいことや、私の母の妹とか、弟とか云う人達が大概寄席芸人だの茶屋奉公だのをしていたことや、私の父が昔は相当道楽者だつたらしいことなどを考え合せてみれば、そんな私の空想が全然根も葉もないものであるとは断言できないだろう。私はしかし芸者と云うものを今でも殆んど知っていないと言つていい。ただ少年の頃から鏡花などの小説を愛読しているし、そういう小説の女主人公などに一種の淡い愛着のようなものさえ感

じているところから、或はそんなことが私をしてかかる夢を私の亡き母にまで托たくさせているのかも知れぬ。

私は一枚の母の若いころの写真からそんな小説的空想さえもほしいままにしながら、しかしそれ以上に突込んで、そういう母の若いころのことや、自分自身の生おい立ちなどについて、人に訊きいてまでも、それを強しいて知ろうとはしなかった。私は小さいときからの性分で、ひとりでに自分に分かって来ていることだけでも、十分に満足して、その自分の知っている範囲のなかだけで、

自分の幼年時代を好きなように形づくって、それを愉<sup>たの</sup>しんでいることが出来たのだった。

## 五

おばさんはまた私に母の実家のことを仔細<sup>しさい</sup>に話してくれた。しかし、そのときも私の期待を裏切って、母の若い頃<sup>も</sup>のことは殆んどなんにも話して貰<sup>もら</sup>えなかつた。そのうち、何かの折にでも自然に聞き出せるかも知れないから、いまはまあそう無理には聞かないことにする。……

母の実家は西村氏である。父は米次郎といった人で、維新前ま

では、靈岸島に店を構えて、諸大名がたのお金御用達ごようたしを勤めていた。市人いちびとでも、苗字みょうじ帯刀を許されていたほどの家がらだつたそうである。母は茅野ちの氏で、玉たまといい、これも神田の古い大きな箆たんす屋の娘であつた。玉は十六の年から本郷の加賀さまの奥へ仕えていた。そうして十九のときに米次郎のところところに嫁とついだが、そのときの婚礼はまだ随分はでなものだつたらしい。いくつも高た張かはりぢようちん提灯をかかげて、花嫁の一行が神田から靈岸島をさして練うかいつてゆくと、丁度途中にめ組の喧嘩けんかがあつた。そこで一行は迂回うかいをしなければならぬかとためらつていると、それをどこかの大名の行列かとまちがえて、喧嘩けんかをしていた鳶とびの者たちが急にさあつと途みちを開いたので、そのままその前を通つてゆくことが出来た。



——そのことを又、皆はたいへん縁起がいいといつて喜んだものだった。

だが、新郎新婦の運命はそれほどしあわせなものではなかった。やがて瓦解がかいになった。それはたちまち若い夫婦に決定的な打撃を与えた。諸侯に貸し付けてあつた金子も当分は取り立てる見込みもつかず、そこで米次郎は窮余の一策として、麻布の飯倉片町に居を移して、大黒屋という刀屋をひらいた。それがうまく当つて、一時は店も繁はんじょう昌しょうした。私の母しげが長女として生れたのはその飯倉であつた。

しかし、その母の生れた明治六年は、また、廃刀令の出た年である。米次郎は再び窮地に立った。丁度そのとき質屋の株を売ろ

うとするものがあつたので、よほど米次郎の心はそちらのほうに動いたが、それには玉がどこまでも反対した。質屋という商売を嫌きらつたのである。そこで米次郎もやむを得ずに芝の烏からすもり森に移つて、小さな骨董屋こつとうをはじめた。が、それも年々思わしくなくなる一方ひで、もう米次郎には挽回の策のほどこしようもなく、とうとう愛宕下あたごしたの裏店うらだなに退いて、余生を侘わびしく過ごす人になつてしまつた。

米次郎がその愛宕下の陋居ろつきよで、脳卒中で亡くなつたのは、明治二十八九年ごろだつた。……

そのとき私の母は二十四五になっていた。死んだ米次郎と玉と

の間には、長女である私の母をはじめ、四人の女とまだ小さな二人の弟たちがいた。

それから私の生れるまでの、十年ちかい年月を、私の母はそれらの若い妹や小さな弟をかかえて、気の弱い、内気な人だったらしいおばあさんを扶<sup>たす</sup>けながら、どんなにけなげに働いたか、そしてどんなに人に知れぬような苦勞をしたか、いま私にはその想像すらも出来ない。私の母を知っていた人達は、母のことを随分しつかりした人で、あんなに負けず嫌いで、勝気な人はなかったと一様に言う。なんでもおじいさんが死んでからまもなく、若い母は夜店などを出して何かをひさいだりしたこともあったという話を、まだ私の小さかったとき母自身の口から何かの折にきいたこ

とのあつたのを、私はうつすらと覚えている。

母のいもうとの中には、茶屋奉公に出ていたものもいる。芸者になつて、きん朝さんという落語家に嫁いだものもいる。それから一番末の弟はとうとう自分から好きで落語家になつてしまつた。しかし、それらの人達はみんな早世してしまつて、いまは亡い。

……

私はそういう母の一家の消長のなかに、江戸の古い町家のあわれな末路の一つを見いだし、何か自分の生い立ちにも一いちまつ抹の云いしれず暗い翳かげのかかっているのを感じるが、しかしそれはそれだけのことである、——もしそういうものが私の心をすこしでも傷いたましむるとすれば、それは私の母をなつかしむ情の一つのあら

われに過ぎないであろう。

## 六

土手下で小さな煙草店をやっていた私の母が、その店を廃めて、小梅の父のところに片づいたのは、私が四つか五つするときだったらしい。私をはじめのうちはその新しい父のことを、「お父ちゃん」とお云いといくら云われても、いつも「ベルのおじちゃん」と呼んでいた。そうして町なかにある仁丹の看板をみつけては一人ですれを指して「お父<sup>さ</sup>うちやん」と言<sup>て</sup>つてばかりいるので、母たちも随分手古摺<sup>てこず</sup>つたらしい。……

「ベル」というのは、その時分、尼寺のそばに住んでいたおじさんのところで飼っていた大きな洋犬の名前で、私はその犬と大の仲好しだった。自分よりもずっと大きなその犬を、小さな私はいつも「お前、かわいいね……」といって撫なでてやっていたそうである。そうしてその頃私は犬さえ見れば、どんな大きな犬でもこわがらずに近づいて行って、「ベル、ベル」と呼んでいた。

或る日、私は新しく自分の父になる人につれられて、何か犬の出てくる外国の活動写真を見にいった。私はそれを最後までたいへん面白がって見ていた。そんな事があつてから、私はその新しい父のことを「ベルのおじちゃん」というようになってしまったのだった。

が、私は新しい父にもそのうちなついてしまった。そうなるのもうすつかりそれを本当のお父うさんだと思ひ込んで、その父の死ぬ日まで、そのまま、私は一ぺんもそんな事を疑ったりしたことはなかった。

その小梅の父が母と一しよになった頃は、それまでの放逸な生活を一扫したばかりのあとで、父はひどく窮迫していたらしい。なんでもお婆さんの話によると、母がはじめて向島のはずれのその家に訪れてみると、なにひとつ世帯道具らしいものもなく、まるであばら家のようななかに、父はしよんぼりと鰥暮らしをしていたのだった。……

父は彫金師であつた。上条氏で、松吉というのが本名である。

その父武次郎は、代々請地うけじに住んでいて、上野輪王寺宮に仕えていた寺侍であつたが、維新後は隠居をし、長男虎間太郎こまたろうを当時江戸派の彫金師として羽ぶりのよかつた尾崎一美かずよしに入門せしめた。その人が師一美に数ある弟子のうちからその才を認められて、一人娘を与えられ、その跡をつぐことになつた。それが惜しくも業なかばにして病歿した上条一寿かずとしである。それに弟が三人あつて、揃そろつて一寿の門に入つていたが、兄の死後にはそれぞれ戸を構えて彫刻を業とした。その一番下の弟で、寿則としのりといつていたのが、私の父となつた人である。

松吉は若いころは家業には身を入れず、仲間のものと遊び歩い



てばかりいた。随分いたずらなこともしたらしい。或夏あるの深夜、友だちと二人で涼をとろうとして吾妻橋の上から大川に飛び込んだところを、丁度巡回中の巡査に心中とまちがわれ、橋の上で人々が大騒ぎをしている間、こつそりと川上に泳ぎついて逃げ去つたという逸話などを残している位である。その頃のことかと思うが、松吉はそういう仲間たちと一しよに瓦かわらまち町の若い小唄の師匠のところけいこにひやかし半分稽古にかよつていたが、そのうちに松吉はその若い小唄の師匠といひ仲になつた。

松吉はどうとうそのおようという若い師匠と、向島の片ほとりに家をもつた。そして二三年同棲どうせいしているうちに、一子を設けたが夭折ようせつさせた。請地にある上条氏の墓のかたわらに、一基の

小さな墓石がある。それがその薄<sup>はっこう</sup>倅な小児の墓なのであつた。

松吉もはじめのうちは、為事<sup>しごと</sup>にも身を入れ、由次郎という内弟<sup>うちぢ</sup>子<sup>でし</sup>もおいて、自分で横浜のお得意先きなども始終まわっていたが、子を失<sup>な</sup>くしてから、又酒にばかり親しむようになって、つい家もあけがちになつた。

弟子の由次郎は、そのあいだにも、ひとりで骨身を惜しまずに働いていた。松吉も、その由次郎に目をかけ、殆<sup>ほと</sup>んど細工場のほこのことは任せ切りにしていた。ところが、或る夜、泥酔してかえつてきた松吉は、其<sup>そこ</sup>処にふと見るべからざるものを見た。――

松吉はさんざん一人で苦しんだ末、何もいわずに、おようを由次郎に添わせてやる決心をした。二人のために亀<sup>かめいど</sup>戸の近くに小

さな家を見つけ、自分のところにあつた世帯道具は何から何まで二人に与えて、そうして自分だけがもとの家に裸同様になつて残つたのである。……

もとより、私の母はそういう経緯のあつたことは知っていたはずである。しかもなお、そういう人のところに、かわいくてかわいくてならない私をつれて再婚したのである。そこにはよほど深い考えもあつたのだろうと思われる。

どんな人でもいい、ただ私を大事にさえしてくれる人であれば——それが母の一番考えていたことであつたようである。それには母がいつもその人の前に頭を下げていなければならぬようでは困る。その人のほうで母にだけはどうしても一生頭の上からな

いように、その人が非常に困っているときに尽くせるだけのことは尽くしておいてやる。そういう不幸な人である方がいい。——  
そういった母の意になつた人が、ようやく其処に見いだされた。  
勝気でしつかりとした人、私のことだとすぐもう夢中になつて  
しまう人、——誰でもが私の母のことをそう云う。そういう負け  
ず嫌きらいな母がおようさんのあとにくると、父は急に醒さめた人のよ  
うになつて、為事にも身を入れ出した。そうして小梅の家は以前  
にもまして、あかるく、人出入りが多くなつていった。

父も母も、江戸っ子肌はだの、さつぱりした気性の人であつたから、  
そのまま私のことでは一度も悶もん着ちやくしたこともないらしく、誰  
れの目にもほんとうの親子と思われるほどだつた。それからまた、

おようさんと以前とかかわらずに付き合つて、由次郎にもずつとうちの為事をしてもらつていた。

小さな私だけはなんにも知らないで、いつかその由次郎にもなつて、来るとかならず肩車に乗せてもらつて、用達ようたしにもしよについていったりしていた。

その五つか六つぐらいの頃の私は、いまの私とはちがつて、かなりな道化ものでもあつたようだ。父や母につれられて、おばさんの家などに行くと、おばさんにすぐ三味線をじやかじやか鳴らして貰もらつて、自分は手拭てぬぐいを頭の上にちよいとのせ、妙な手つきや腰つきをして、「猫じゃ、猫じゃ……」とひとりで唄いながら、皆にひと踊り踊つてみせた。そんな俗踊をいつのまにか見みよう見

真似まねで覚えてしまったのである。

私の生父は、裁判所などに出ている、謹厳一方の人ではなかつたらしく、三味線の音色を何よりも好んでいたそうである。その血すじをひいた生父のことはもうすっかり忘れてしまって、私のことをかわいがっていてくれる新しい父や母やそのほかの人々の間で、何も知らず、ただ無心に、おばさんの三味線に合わせながら「猫じゃ、猫じゃ」を踊っていた、小さな道化ものの自分の姿が、いま思いかえしてみると、自分のことながらなかなかにあわれ深く思えてならない。……

## 七

雪の下のたいそう美しく咲いていた、田端の、おじさんとおばさんとの家で、私が六月の日の傾くのも知らずに聞いた自分の生おい立ちや私の母の話を、以上、そのままにざあつと書いてみた。

いまの私には、父の死の前後から中絶しがちになっていた小説「幼年時代」を再び取り上げて、書きつづける気もちにはどうしてもなれないので、それはそれで打ち切り、こんど改めておばさんたちに聞いた話は、此処ここにはほんの拾遺のようなものとして附とどけ加えておくに止めた。

私はいまこの稿を終えようとするとき、その田端へ往いった数日後、私はまたふいと何かに誘われるような気もちで、東京に出て、

ひとりで請地の円通寺を訪れた、六月のうすら曇った日のことを  
思い出す。

——父母の墓のまわりには、何か、目に立つほど変っていた。  
それはその墓のうしろに亡父の百力日忌のときの卒塔婆そとばが数本  
立っているせいばかりではなさそうだった。又、このまえ妻と来  
たとき、あちらこちらに咲いていたしきみ櫛の花がもう散ったあとで、  
隣の墓の垣の破れかけたのからみついた昼顔の花がこちらの  
墓の前まではかなげな色をして這はいよっているせいでもなさそう  
だった。

変化はむしろ私自身のうちにだけ起っていたのであろう。その  
とき私はたった一人きりだった。一人きりで私がこの墓の前に立



つたのは、これがはじめである。しばらく一人きりでいたかったために、寺にも寄らずに真つすぐに墓のほうに来た。そうして私はただ柵さくの外から苔こけのついた墓を向いてじつと目をつぶっていただけである。

「おれはどうしていままでお母さんのお墓まいり位はもつとしておいて上げなかつたのだらう」と私は考え続けていた。「……いつも、いくらお母さんのだつて、お墓なんぞはといった気もちでいた。そういった気持で、自分がお母さんのために何をしようと思まいと、いつてみればお母さんのことなど考えようと考えまいとおんなじだ、といったように、お母さんというものに安心しきつていられたのだ。だが、すべてを知ってみると、なんだかお母

さんの事がかわいそうでかわいそうでならなくなる。このころ漸ようやつとおれにはお母さんの事が身にしみて考えられるようになってきたのだ。……」

こんな場末の汚きたない寺の、こんな苔だらけの墓の中に、おまけに生前に見たこともないような人達と一しよになって、——と云うよりも、その佗わびしい墓さえ、いまの私には、いわば、自分にとつてかけがえのないものに思われた。

私はその墓を一巡してみた。そしてはじめて母の戒名がどこに刻せられてあるかを捜した。すると、墓の側面の一隅に「微笑院……」とあるのを見つけた。ほんとうを云うと、それを忘れていはすまいかと思つたが、その三字を認めるとすぐそれが思い出せ

た。その下方に大正十二年九月一日歿ぼつと刻せられてあるのが、気のせいか、私には妙に痛ましく感ぜられた。

私はいつか墓を一巡して、再び正面に立った。墓に向つて左側に、一本の黄楊つげの木が植えられているが、いまはその木かげになつて半ば隠れてよく見えなくなっている、一基の小さな墓がある。いつか妻と二人して、どうしてその子供らしい墓だけが一つ離れて立っているのだらうといぶかしんだ奴やつだが、それが私の小梅の父とおようさんとの間にできた子の墓なのであろう。何んと刻せられているかと思つて、私は柵の外から黄楊の木の枝をもちあげながら、見てみたが、脆もろい石質だとみえて石の面が殆ほとんど磨滅すりめつしていて、わずかに「……童……」という一字だけが残っているき

りだった。それが男の子だかも、女の子だかも、もう知るよしもないのである。――

もう誰にもかえりみられることのない、そんな薄倅な幼児の墓を私は何か一種の感動をもって眺<sup>なが</sup>めているうちに、ふいと、一瞬くつきりと、自分の知らなかった頃の小梅の父の、その子の父親としての若い姿が泛<sup>うか</sup>ぶような気がした。……

そういう若い頃からの、この一市<sup>しせいじん</sup>井人のこれまでの長い一生、震災で私の母を失ってからの十何年かの淋<sup>さび</sup>しい独居同様の生活、ことに病身で、殆んど転地生活ばかりつづけていた私を相手のたよりない晩年、――かなりな酒好きで、多少の道楽はしたようだが、どこまでもやさしい心の持ち主だった父は、私の母には常に

いちもく  
一 目置いていたようである。それは母の亡くなつたのちも、母のために我儘わがままにせられていた私を前と変らずに大事にし、一たびも疎略にしなかつたほどだつた。私はその間の事情はすこしも知らなかつたけれど、いつも父の愛に信じきつてそれに裏切られたことはなかつたのだつた。

その父をも晩年に充分いたわつてあげることのできなかつた自分を思うと、何んともいいがたい悔恨が私の胸をしめつけて来た。私はしばらくそれを咏こらえるようにして、父母の墓の前にじつと立ちつくしていた。

そうやって私は二三十分ぐらいその墓のほとりにいてから、漸

つとそこを離れて、錆びたトタン堀べいのほうに寄せて並べられてあ  
る無縁らしい古い墓石を一つ一つゆつくり見てゆきながら、とう  
とうその墓地から立ち出いでた。

飛木いなり稲荷の前を東に一二丁ほど往くと、そこが請地の踏切であ  
る。私は東武電車で浅草に出ようと思つて、その踏切のほうに向  
つていった。その場末の町らしく、低い汚い小家ばかりの立ち並  
んでいる間を、私はいかにも他郷のものらしい気もちになつて歩  
いているうちに、こんどは一度、私の殆んど覚えていない生父の  
墓まいりをしてみるのもいいなと思つた。何んでもないようにふ  
らつと出かけていつて、お墓まいりだけをして、ふらつと歸つて  
くる。それだけでいい。だが、その私の殆んど覚えていない生父

の墓のある寺は一体何処どこにあるのかしら。(註一)

なんでも私のごく小さい時分、一度か二度だけ、母にどこか山の手のほうの、遠いお寺に墓まいりに連れられていった記憶がかすかにある。その寺の黒い門だけが妙に自分の記憶の底に残っている。それは或る奥ぶかい路地の突きあたりにあつて、大きな樹かなんかがその門の傍そばに立っていた。幼い私は母につれられたまま、誰れの墓とも知らずに、一しよにそれを拜おがんで帰ってきた。母は別にそのときも私には何も言いきかせなかった。それがその生父の墓だったのではあるまいか。あのときの、いかにも山の手らしい、木立の多い、小ぢんまりとした寺はどこにあつたのやら。——そう、そう、そう云えば、たしか、そのときの往きか帰りの

電車の中だったとおもう。小さな私は往きるときも、帰りのときも、その道中があんまり長いので、いつも電車の中でひとつきりねむ寝てしまっていたが、突然母にゆりおこされた。

「辰雄、辰雄、ほら、あの横町をござらん、あそこにお前の生れた家があつたんだよ。……」

そういわれて、私は睡たい目をこすりこすりあけてみた。そうして母が電車の窓から私に指さして見せている横町の方へいそいでその目をやった。が、電車はもうその横町をあとにして、お屋敷の多い、並木のある道を走っていた。私はなんだかそれだけではあんまり物足らなかつたが、それ以上何もきかないで、そのまま又そのお母さんにもたれながらうつらうつら睡ってしまった。：



…

いま思うと私の生れたのは麴町平河町だというから、あれはきつと三宅坂みやけざかと赤坂見附との間ぐらいの見当になるだろう。そうとすると、私の生父の墓は青山か千駄ヶ谷あたりにあるのだろう。誰れにきいたらいいかしらと思つて、私はふと麻布で茶の湯の師匠をしていたおばさんがもうかなりのお年でまだ存命していられるらしいのを思い出した。そうだ、あのおばさんだけがいままでは私の生父にゆかりのあるただ一人のかたなのだ。なんでもほんとうの妹ごだとか。私はいままで何んにも知らなかつたので、ついそのおばさんにはよそよそしくばかりしていたが、そのうちには是非ともお訪ねたずしてみたいものだ。……

いかにも場末らしく薄汚い請地駅で、ながいこと浅草行の電車を待ちながら、私はそんなことを一人で考え続けていた。

註一 私の生父の墓のある寺のことは田端のおばさんもよく

覚えていなかった。なんでも河内山宗春の墓があるの  
で有名なお寺だとか云うことを知っているだけで、一  
度も其処そこには往ったことがないそうだ。その後、私は  
麻布のおばさんのところにお訪たずねしようときおり思  
いながら、なかなか往かれないでいるうちに、その年  
老いたおばさんが突然亡なくなられてしまわれた。私は  
何んとも取りかえしのつかない事をしてしまった。し

かし、私の知りたがっていた生父の墓だけは、そのおなじ寺にそのおばさんも葬られることになったので、  
図らずもそれを知ることが出来た。その寺は高德寺といつて、やはり青山にあった。静かな裏通りの、或る路地のつきあたりに、その黒い門を見いだしたとき、  
ああ、これだったのかと思つた。門のかたわらでしきみ櫛などをひさいでいる爺は、もう八十を越していそうなほどの老人で、それに聞いてみたら私の生父のことなどもよく覚えていそうな気がした。しかし私はなんにも聞かずに、ただ老翁の方にしばらく目を注いだきりで、そのままその小屋のまえを通り過ぎてしまった。



# 青空文庫情報

底本：「幼年時代・晩夏」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年8月5日発行

1970（昭和45）年1月30日16刷改版

1987（昭和62）年9月15日38刷

初出：「文學界」

1942（昭和17）年8月号

初収単行本：「幼年時代」青磁社

1942（昭和17）年8月20日

※初出情報は、「堀辰雄全集第2巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年8月30日、解題による。

※底本には、複数の作品の註がまとめて掲載してありましたが、ここでは、本作品に対するもののみを、通し番号を付け替えて、ファイル末におきました。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

2010年9月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 花を持てる女

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>